

## 『音のレッドデータブック』

～武蔵大学社会学部メディア社会学科ゼミの取り組みから～

Report on Production of “Red Data Book of Sounds”

兼古勝史(武蔵大学・立教大学)

Katsushi KANEKO (Musashi University, Rikkyo University)

(キーワード)

音、レッドデータブック、アーカイブ、生活文化、ゼミ活動

### 要旨

本発表では、2016年3月、武蔵大学社会学部メディア社会学科の2年生ゼミ(兼古ゼミ)学生が作成した『音のレッドデータブック』の取り組みについて、その概要を報告した。

#### (1) レッドデータブックとは

『レッドデータブック』とは、もともと絶滅のおそれのある野生生物について記したデータブックのことで、国際自然保護連合(ICUN)が中心となって1966年に作成されたもの<sup>1</sup>に始まり、日本では1991年から環境庁・環境省が作成した一連の日本版レッドデータブック『日本の絶滅のおそれのある野生生物』(財団法人日本野生生物研究センター、1991)<sup>2</sup>などが知られている。この他、東京都を初め各都道府県や自治体で、植物・菌類から動物まで様々な地域のレッドデータブックが作成されている。

『レッドデータブック』は野生生物に限らず、例えば『地名レッドデータブック』<sup>3</sup>、『日本の地形レッドデータブック』<sup>4</sup>、『兵庫県の民俗芸能—民俗芸能レッドデータブック』<sup>5</sup>あるいはユネスコの『世界消滅危機言語地図』(言葉のレッドデータブック)<sup>6</sup>など様々な形のもものが公開されている。こうした多様な「レッドデータブック」の存在は、本来野生生物を対象としたデータブックである「レッドデータブック」が、現在ではその範囲を超えて、失われてしまった(失われつつある)環境や文化等を表現するツールのひとつとして用いられ広がっていることを示している

#### (2) 『音のレッドデータブック』の取り組み

だがまだ音を対象としたレッドデータブックはないということで、武蔵大学社会学部メディア社会学科兼古ゼミの学生たちがゼミ活動の一環として2年前から取り組み作成したのが『音のレッド

<sup>1</sup> International Union for Conservation of Nature and Natural

Resources : Red data book, (The Union, Morges, Switzerland, 1966)

<sup>2</sup> 環境庁編:『日本の絶滅のおそれのある野生生物～レッドデータブック～(脊椎動物編)』『同(無脊椎動物編)』(財団法人日本野生生物研究センター、東京、1991)他。その2年前には日本で最初の『レッドデータブック』として、日本自然保護協会:『我が国における保護上重要な植物種の現状』(日本自然保護協会、共同刊行:世界自然保護基金日本委員会、東京、1989.11.)が発行されている。

<sup>3</sup> 金井弘夫編:『新日本地名索引。別巻(地名レッドデータブック)』(アボック社出版局、石垣、1990) 26-39.

<sup>4</sup> 小泉武栄、青木賢人編:『日本の地形レッドデータブック。第1集』(日本の地形レッドデータブック作成委員会、小金井、1994)

<sup>5</sup> 兵庫県教育委員会:『兵庫県の民俗芸能:民俗芸能レッドデータブック』(兵庫県教育委員会、神戸、1997)

<sup>6</sup> Unesco : *Atlas of the world's languages in danger of disappearing*, (UNESCO, Paris 2001)

データブック』だ。日本国内で聞かれた音の中から、人間の生活と関わりの深い音を対象として、失われた音、失われつつある音等を選び、その音を大きく「自然音」「人間音」（屋内・屋外）、「機械音」（一年目は「自然音」「家庭・生活音」「公共空間音」「メディア音」）などに分類、音の盛衰状況に応じて「絶滅音」「絶滅危惧音」「希少音」「地域限定音」など絶滅度のランクを分けた。

「絶滅音」には、たとえばニホンオオカミの声、タイプライターやガリ版の音などの他、河童や鶴といった妖怪等の音も含まれる。「絶滅危惧音」には引き戸や缶切り、風鈴（に涼を聴く）、豆腐屋のラッパ等の他、公衆電話のカード返却音、VHS テープやフロッピーディスクに関わる音などメディアに関わる音も多い、学生から出された項目の中には「食事の準備ができたと家族を呼ぶ声」というものもある。物理的に鳴り響く実際の音響だけでなく、歴史的に受け継がれてきたイメージの音や音にどのようなメッセージを聞き取るかといった聞き方・日本人の耳のありようも視野に入れているところがポイントだ。

### （3）絶滅理由・絶滅の様相、期間・時期

音の絶滅・減少した理由について考えてみると「ニホンオオカミ」のように音の発生源そのものが失われてしまったもの（完全喪失）もあれば、ある種の「虫」や「鳥」のように人間生活との接点がなくなってしまった音（機会の喪失）、「妖怪」の音や「観天望気」の音のように今も聞こえているにも関わらず人間がその音に耳を傾けたり意味を聞き取ることがなくなった音（関係性の喪失）、そして外来文化の輸入や技術の発達等によりその音が別の音へと移りかわったもの（音の変化による喪失）など一様ではないことが見えてくる。

音の存続した期間や、消滅・現象の時期にも注目すると。たとえば「千歯抜き」や「石

臼」などのように、日本人の歴史や生活文化とともに世代を超えて継続してきた音もあれば、アメリカン・クラッカー（71年に大ブームとなったおもちゃ、危険性が指摘されすぐに下火となる）のようにある一時期に広まりすぐに消えた音もある、作成された音年表から見えてきたのは多くの重要な音が20世紀、高度成長期を期に減少・消失していることだ。

音は時代や環境を映し出す「見えない鏡」でもある。『音のレッドデータブック』から見えてくること、それは私たちの世界や生き方の変化であり、現代社会が何を切り捨て、失ってきたかでもある。写真や映像のアーカイブが盛んに注目される昨今、地域や生活文化のアーカイブとして『音のレッドデータブック』も考えてみてはどうだろうか。